The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教性の測定における共通性 : 3回のインターネット調査の経緯
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68291
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教性の測定における共通性
―3 回のインターネット調査の経緯―

川　端　　亮

目　次

１．はじめに
２．調査方法の特徴
３．2010 年日米比較調査
４．2015 年調査
５．2016 年調査
６．今後の課題

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 44；61-78（2018）

宗教性の測定における共通性
―3 回のインターネット調査の経緯―

川　端　　亮

1．はじめに

宗教性（religiosity）とは、宗教に関わる信念や知識、経験、行動などの多様な側面を含むものである。「複数のあるいはほとんどの宗教と呼ばれる現象に共通するような性格の事柄に対する表現として意識されることが多い」（井上 2005、210）と言われる場合には、「聖なるもの」や「スピリチュアリティ」の議論などのように、宗教の普遍的な性質というような意味合いで使われる用語である。

しかしここで安易に「普遍性」や「共通性」ということばを使うと、多くの研究者から非難を受けることだろう。完全に普遍的な宗教性があるならば、「日本とアメリカの宗教性は共通する」という言い方は可能であるが、実際には「宗教性は日本とアメリカでは異なる」という言明の方が、より頻繁に目にするからである。

また、計量研究の分野では、個人の宗教性という言い方もする場合もあり（この場合は、個々人の宗教性がある程度異なっていることを含意する）、尺度の一つとして取り上げられることも多い。尺度の得点を平均的に集約したり、一部の特徴を強調してある特定教団の宗教性や日本人の宗教性、アメリカ合衆国の宗教性という言い方をする場合もある。つまり宗教性という言葉の使い方は研究目的や文脈によってさまざまであり、共通性という場合には、どの範囲のどの側面なのかを慎重に考えなければならない。

本稿は計量研究の手法による宗教性の研究であり、宗教の共通する部分を探索するものではあるものの、それが宗教に関わる広い範囲で完全に共通であることを意味しないし、その広がりも世界中の国に普遍的であるとまでは言うことはできない。

宗教的信念と行動がかなり強く結びついているアメリカのケースもあれば、日本のようにいくつかの宗教的としか見えない行動が宗教的な信念や知識と結びついていないケースもある。もっとも典型的なものは、多くのキリスト教式の結婚式であり、お盆やお彼岸の墓参りや上棟式、初もうでなどの行動もそれほど確固とした宗教的信念に基づいて行われていないケースも多いだろう。

このように宗教の全体を細部にまで目を配ってみてみると、各国の宗教や宗教文化、宗教性は多様であり、とくに日本の場合を考えると、ユダヤ＝キリスト教の伝統がある欧米の国々とその要素はかなり異なる構成、組み合わせ方であるように思われる。宗教

は全体的に見れば各国によって異なり、それが各国独自の宗教文化として表れているので、宗教性も多様であると考えられる。そして、日本の宗教研究は、わが国の宗教文化の特異性を前提に行われてきたといえるだろう。

一方で異なる宗教文化の国や地域をまたがる共通な尺度を見出すことができれば、それは宗教研究に役立つだろうか。もちろん、それは宗教性の一部分であり、全体ではないだろう。ここでは、必ずしも１つの尺度だけが存在するという前提ではないので、宗教性の尺度が複数あることも想定している。ここで共通するという意味は、対象とする国、宗教、宗教文化において、より信仰心を持っているもののほうが、より信仰心を持たないものに比べて、より賛成する（否定的なものには反対する）宗教に関わる言明のセットであり、いくつかの言明（質問文）による共通する尺度を作成するということである。

たった一つでも共通する宗教性の尺度があれば、宗教研究にどのようなメリットをもたらすだろうか。以下の４点が考えられる。

第一に、国際比較研究に非常に役立つ。グローバル化に伴い、国際比較研究が盛んにおこなわれている。1980 年代より国際比較のための大規模な社会調査が実施されるようになってきた。1981 年から始まったヨーロッパ価値観調査と世界価値観調査、1985 年より始まった ISSP (International Social Survey Programme) 調査などによって、数十カ国が参加する各国を比較する国際比較研究が行われるようになり、数多くの分析結果が出版されている。そこでは、各国の宗教性を共通の質問文で測り、国際比較する計量分析が行われている。その成果は数多い。しかしながら、そこで用いられる質問文で測られる宗教性の測定は、日本でもアメリカでも同じといえるのだろうか。日本の研究者の多くは、そもそもそのような質問文はユダヤ＝キリスト教の文化に基づくもので、日本の宗教には当てはまらないと考えている。たとえば質問文では「神」(a God) が使われるが、日本では神ということばを使うときも神々という場合も多いし、キリスト教の神とは同じようなものを指すとはいいがたい (Manabe 2011)。

第二に、国際比較のみならず、日本国内の宗教教団の比較研究にも大いに役立つ。宗教性の共通尺度が日本においてはどの教団の信仰者においても同じような平均値をとらないならば、すなわち仏教と神道の信仰者においてや、浄土系新宗教と法華系新宗教において宗教性の値が大きく異なる場合など、国内の教団間の比較が可能となる。そしてそれはアメリカのギガチャーチの教会の信者の宗教性の値よりも大きいのか小さいのかを比較することができる。あるいは、日本の創価学会の会員の宗教性の値とアメリカの創価学会 SGI のメンバーの宗教性の値を比較するような研究も行うことができるだろう。

3 番目に、信仰者と信仰を持たないものの比較研究に役立つ。2 番目の利点を発展させれば、信仰者と信仰を持たないものの宗教性が異なる。このケースは、おそらく信仰者がよりボランティア活動をするとか、より生活満足度が高いというような研究、すなわち宗教性を独立変数とし、社会意識や行動との関連を明らかにし、宗教性の長所や短所を明らかにする研究に役立つ。

最後に入信過程の研究にも役立つだろう。宗教性の値がどのような経験によって、変化していくのか、それはまた宗教文化が異なっても同じであるのか、などが検証できる可能性がある。

以上の長所を考えて、宗教文化を超えた一つの尺度として共通する宗教性を抽出することを試みた。その際には、宗教行動や宗教的な経験の側面ではなく、宗教に対する考え方や感じ方である宗教的信念を中心に扱うことにする。これまでに 2011 年の日米調査と 2015 年と 2016 年の 8 か国調査を実施し、この問題に取り組んできている。本論文は、これら３回の調査の経緯と今後の課題をまとめて報告するものである。

２．調査方法の特徴

3 回の調査の方法については、いくつかの特徴がある。まず、質問文の作成については、宗教教義や国内外の学術的な宗教理論を文献や事例から収集し、そこから宗教に対する考え方を尋ねる質問文を作成した。そのような資料としては、

① 宗教理論 [1)]
② 特定宗教の教義 [2)]
③ 宗教教義に関する啓蒙書など [3)]

を用いた。日米比較を行うことを念頭に置き、日米両国で刊行されている書籍を優先した。

ついでそれらをデータベースに入力し、多くの教義や宗教理論に含まれる複数の宗教概念間の関係をデータベース上で整理した。次に、同じデータベースにこれまでの宗教性の研究で用いられてきた国内外の質問文を調べ（金児 1997, Hill and Hood eds. 1999, 西脇 2004, 21st Century Center of Excellence Program 2003, 杉山 2004 など）、宗教概念と質問文の相互関係を整理した。

ここでデータベースを活用する利点は以下の２点である [4)]。第一に、各宗教文化によって、God や神々などの各宗教固有の表現が使われるが、それを統一する必要がある。そのためには、宗教的な概念（たとえば「生命の生まれ変わり」）と各宗教文化での表現（「再生」や「輪廻転生」）と対象者に尋ねられる質問文としての表現（「人は生まれ変わる」）の 3 つのレベルにおいて、それぞれ理論的研究、教典類、先行研究の中から関連する要素を抽出し、関連付ける必要がある。それぞれの宗教文化での表現とその上位にある宗教概念、さらには具体的な質問文の対応関係を保持して検討するためには、データベースの関連づける機能が必要である。

第二に 3 つのレベルそれぞれの異同を網羅的に検討する必要があるが、候補となる宗教上の要素は数百、これまでの使われた質問文は数千個にも上るであろうから、その組み合わせは膨大な数で、コンピュータの助けなしに網羅的な検討は困難である。データベースを活用し、組織的、系統的に検討するより他に方法はない。

以上の点でデータベースの利用は不可欠である。データベースを用いて概念と関連付

けながら質問文を検討していった。とくに調査する国によって等価な質問文となるように、本調査の質問文においては、宗教伝統、宗教文化によらない一般的用語を使うように努力した。しかし、「神」や「仏」などの超越的あるいは、神聖な対象を指す言葉を一般的なことばに置き換えることはできなかったため、以下のような注釈をつけて調査を実施した。

> この調査は国際比較研究の一環として実施しています。そのため、特定の文化や宗教などに偏らないような表現をあえて用いていますので、質問の中には聞きなれない言葉やあいまいな言葉が含まれている場合がございます。ご自分の信仰や考え方に従って、あてはまるものをお答えください。
>
> あなたは、次のそれぞれについて、賛成しますか。あてはまるものを選んでください。※「神」や「魂」という言葉を含んだ質問がありますが、これは特定の宗教教義の用語ではなくあくまでも一般的な表現です。あなた自身が「神」や「魂」という言葉で考えることに置き換えて、お答えください。

回答者に提示された選択肢は、「反対」、「どちらかというと反対」、「どちらともいえない」、「どちらかというと賛成」、「賛成」のほかに、「答えたくない」という選択肢と「意味が理解できない」という選択肢を設けた。本調査研究の場合、多くの質問文が新たに作られていること、そしてそれらの質問文が対象とする国の言語に翻訳された後に同じ意味を伝えていることが望ましいが、各国によって、「神」や「霊」などの指すものは異なるので、質問文が理解されたかどうかを確認するために「意味が理解できない」という選択肢を用意した。また、質問項目それぞれについて、「コメント欄」として自由回答欄をつけ、疑問や意見がある場合は記載してもらうこととした。ただし、自由回答は必須回答とはしていない。

３．2010 年日米比較調査

データベースを用いて、100 項目を精選し、調査を実施した。用いた質問文は表１と後掲の表３の「2010 年日米比較調査」の列において、〇が付されている質問文である。調査は、2010 年、アメリカ及び日本の調査会社に委託して、インターネットを用いて行った。調査会社の提携パネル総数は全世界で 500 万以上（うち、日本の調査会社のパネル総数は 50 万以上）であるが、ここからアメリカ・日本とも 600 人以上を目標にリクルーティングを行った。対象者の割り当て方法は、日米で同じである。性別は半分ずつ割り当て、アメリカの男性が 331 人、女性が 334 人、日本の男性が 355 人、女性が 362 人の回答を得た。年齢は、20 歳から 69 歳までを対象とし、20 歳代から 60 歳代まで 10 歳刻

みで、均等に割り当てた。回答者の中でもっとも少ないのが 30 歳代の 269 人で、最も多いのが 40 歳代の 289 人である。回答者は、アメリカが 665 人、日本が 717 人で、合計 1382 人である。オンライン調査としては、日本では 50 歳以上はまだインターネットの利用率が低く、特に偏りがあると言われ、調査方法としての 50 歳未満に限定する方が望ましいかもしれないが、日本においては年齢が高くなればなるほど、宗教を信じる傾向が強く、20 歳代で信仰を持っている人は、10%程度であるが、60 歳代になると、およそ半数となり、70 歳代になると、60%に達するという傾向があるため、60 歳代までを対象とした。

さらに信仰の有無を問うスクリーニングを行い、宗教を信じている「信仰者」、非信仰だが宗教に関心のある「関心者」、信仰も関心もない「無関心者」の 3 つが均等になおかつそれぞれについて年齢も均等になるように割り当てた。その結果、回答者の内訳は、宗教を信じている「信仰者」（米 224 人、日 234 人）、非信仰だが宗教に関心のある「関心者」（米 218 人、日 230 人）、信仰も関心もない「無関心者」（米 223 人、日 253 人）となった。そのように信仰区分と年齢で均等割り当て法を用いる理由は、「宗教を信じている」と答える信仰者の比率が日米で大幅に違うからであり、また年齢構成が両国で異なるからである。そのような宗教状況に断絶ともいえる差がある 2 国間の状況においては、日本人全般とアメリカ人全般に共通する宗教性を見いだすことは、これまでの研究でも困難であった。それに対してこの日米比較調査では、DIF(differential Item Functioning) 分析の方法を用いて、アメリカ人・日本人にかかわらず信仰区分間で共通傾向を示す宗教性を見いだすことを目標とした [5)]。これが宗教文化を超えて共通な宗教性を探求するためのまず最初のステップである。

データは、日米の信仰者に限定し、二元配置の分散分析を用いた DIF 分析によって、共通する項目を選別した [6)]。

二元配置の分散分析の結果、5%水準で交互作用項がなかった項目、すなわち non-uniform DIF でなかった項目は 23 項目あった。ここで統計的検定の慣例に従えば 5%水準で有意かどうかで線引きするのは妥当であるが、本研究のように探索的に日米で共通性を示す質問項目を探索する場合には、可能性としてもう少し基準を緩めるということも考えられる。下位検定において信仰者か無関心者かという信仰区分の効果が日米で共に統計的に有意な項目が他に 67 項目もあった [7)]。

表 1 は、2010 年日米調査の質問文 100 項目のうち、2016 年調査で用いなかった 66 項目の一覧である。2010 年日米調査で用いられ、その後の 2 回の調査で用いられていない、上の 11 項目は、日米の 2 国間で共通性が見られない項目である。日米それぞれの国で異なる意味を持つ項目といえる。また、2010 年日米調査と 2015 年調査に用いられ、2016 年調査に採用されなかった質問文 44 項目は、8 か国において、共通であることが示されていない項目である。多くは、共通ではない可能性が高い項目であるが、一部には共通する可能性もあるが、2016 年調査の質問数に制限があって採用できなかった項目も含ま

れている。

表１　質問文一覧表　その１

質問文	2010年日米比較調査	2015年調査
問題のある（有害な）宗教も多い。	○	－
生理的・身体的な欲望をコントロールすることで聖なる力を得ることができる。	○	－
世界には終わりがある。	○	－
人には生まれてきた使命（意味）があり、それを遂行することで真の幸福を得ることができる。	○	－
神を見習って、それに近づくようにふるまう。	○	－
信仰によって、人生の目的が与えられる。	○	－
信仰とは神の命令・意志に従うことである。	○	－
宗教の儀礼に参加する。	○	－
宗教とは良心や道徳のよりどころである。	○	－
宗教が定める奉仕活動をする。	○	－
ものごとの一面だけにこだわらず、多様な見方を受け入れる。	○	－
瞑想（めいそう）をすること。	○	○
良いできごとも悪いできごとも、すべてのできごとは、自分の心のあり方を反映している。	○	○
利己心が、苦しみや不幸の原因である。	○	○
普通の人々には、宗教教団を通じなければ、「神」とのかかわりは不可能である。	○	○
大災害は、人々の心・行いが正しくないことで起きる。	○	○
他人や霊が自分に強い悪感情を持つことは、不幸をもたらす。	○	○
他者の幸福を「神」に願ったり感謝すること。	○	○
他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。	○	○
全てを知り万能な、「神」が存在する。	○	○
聖なる力に通じる場所がある。	○	○
聖なるシンボルを身につけること。	○	○
世界は、「神」によってつくられた。	○	○
世界の平和を祈ること。	○	○
人間は、宇宙と一体の大生命から生まれ、死後に再びそこに戻る。	○	○
人間は、「神」の性質を分かち与えられている。	○	○
心を込めて「神」を信じる者は、救われる。	○	○
信仰にしたがった生活をすること。	○	○
宗教的行動として、神社、寺院、教会などに行くこと。	○	○
宗教的儀礼や修行によって、「魂」はより活発に働く。	○	○
宗教的儀礼によって、人間は清められる。	○	○
宗教的な真理を完全に理解することは人間には不可能であり、それよりも宗教の教えを実践に専念すること。	○	○
宗教的な真理は、言葉で言い表わせない。	○	○
宗教的な献金や寄付をすること。	○	○
宗教の教えについて、書物を読んだり話を聞いたりすること。	○	○
宗教が禁止していることをしないようにすること。	○	○
執着がなければ、人は苦しみから解放される。	○	○
自分の直観に正直であること。	○	○
自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。	○	○
死後の世界はある。	○	○
山や川、草や木などの自然に、霊が宿っている。	○	○
言葉には目に見えない力があり、良いことまたは悪いことを口にすれば、それが実現する。	○	○
祈りや宗教的儀礼によって、成功や幸福がもたらされる。	○	○
運命は変えることができない。	○	○
宇宙には、人間を超えた知的存在がいる。	○	○
トリックではない本物の超能力はある。	○	○
この世界のあらゆるものは、限りのある存在で、永遠の存在ではない。	○	○
この世は仮（かり）のもので、本当に価値があるのは、この世を超えた別の世界である。	○	○
この世は、悪で満ちており、人間が苦しむところである。	○	○
この世のあらゆるものは、相互に関係しあって存在しているので、単独で存在することはできない。	○	○
お祈りをすること。	○	○
いつも、明るい気持ちをもつこと。	○	○
あらゆることを心を込めて行なうこと。	○	○
あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。	○	○
「神」を信じることで、病気が治る（なおる）。	○	○
「神」を信じることで、人間関係の問題は解決される。	○	○
「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。	○	○
「神」を信じることで、社会的地位は上がる。	○	○
「神」を信じることで、永遠の命が得られる。	○	○
「神」を愛すること。	○	○
「神」は人間を愛している。	○	○
「神」は、存在する。	○	○
「神」は、人間を裁（さば）き、罰を与える。	○	○
「神」は、人間を救うために現れる。	○	○
「神」は、いつも人間のそばにいて、人間を護（まも）ってくれている。	○	○
「今、ここ」での瞬間を大切にすること。	○	○

4．2015 年調査

2013 年に科研費基盤研究 A の採択に伴い、研究組織を拡大した。宗教学や宗教哲学を専門とする研究者を加え、再度質問項目を検討した。まず、上位に当たる宗教概念について、抜け落ちているものがないかを検討し、2010 年日米比較調査で共通とされた項目にも留意して、186 項目を用いて調査した。表 2 はその中で、2015 年調査のみで尋ねた質問文の一覧である。

調査は、インド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアの 8 カ国を対象とし、調査会社を通してインターネット調査を実施した。対象国は、世界の主要な宗教を信じている人が多い国を選び、なおかつインターネットで調査可能かどうかを考慮した。すなわち、世界で一番信仰者数が多いキリスト教は、カトリックとしてイタリア、プロテスタントとしてアメリカ、ロシア正教としてロシアを対象とし、２番目に信仰者が多いイスラムとしてトルコ [8)]、3 番目に信仰者が多いヒンドゥーからはインドを対象とした。仏教や道教などは信仰者数が世界的に見てあまり多いとはいえないが、異なる宗教ということで対象とし、仏教はタイ、道教は台湾 [9)] を対象とした。

調査票は日本語で作成し、翻訳会社に委託して翻訳を行った。インドは英語、トルコはトルコ語、アメリカは英語、イタリアはイタリア語、台湾は中国語繁体字、タイはタイ語、ロシアはロシア語に翻訳した [10)]。

調査内容は、属性については、性別、年齢、職業、居住地、学歴で、アメリカについては人種・民族を質問に追加した。宗教に関する意識項目は、全部で 186 項目であり、そのうちの 183 項目は、3 グループに分け、61 項目ずつを対象者に質問した。第 1 グループの回答者は 8 カ国で 3,053 人、第２グループの回答者は 2,969 人、第３グループの回答者は 3,049 人である。

質問文につけたリード文は 2010 年日米比較調査と同じである。実施開始の時期はインドとトルコが 2015 年 1 月で、その他の 6 カ国は、2015 年 3 月である [11)]。

インターネットによる調査なので、調査対象者は決して各国を代表するサンプルであるとはいえない。しかしながらインターネットによる調査といえども、各宗教伝統を代表する国々で宗教的信念を共通の質問で数多く質問する調査がない現状を考えれば、その結果がどのようなものになるのかは興味が惹かれるであろう。

また、これ以降の調査研究が以前の 2010 年日米比較調査と違う点は、対象とする国を増やしたことである。2 カ国を対象とする場合であれば、分散分析による DIF 分析も有効な方法であるし、因子分析を用いることを考えると、２カ国の調査データに関して、共通の因子があるかどうかを確かめるためには、多母集団同時分析を行い、検証するという方法が考えられる。しかし、国の数が増えると（たとえば 2015 年調査のように 8 カ国にもなると）、すべての国で交互作用がない結果をえることは次第に難しくなるし、8 カ国となると多母集団同時分析で共通の因子を抽出することは現実的には難しいだろ

う。Van de Vijver らは、対象とする国々のデータを一つにまとめて因子分析し、ある因子構造が確証されたらそれらの国々には共通の因子構造があると考える方法をとっている（Van de Vijver, Valchev, and Suanet, 2009: 55）。

表 2　質問文の一覧表　その 2

質問文	2015年調査
贅沢をしないで清く正しく生きること。	○
霊は存在する。	○
霊の世界は、この世界と密接に関連し合っている。	○
欲望をコントロールすることで、聖なる力をえることができる。	○
予言や予知ができる人もいる。	○
唯一の「神」のみが存在する。	○
目の前の出来事を、あるがままに見つめること。	○
目の前のものごとに注意を集中すること。	○
明確に特定できなくとも、何らかの「神」を信じること。	○
本当の幸福は、この世にあるのではなく、この世を超えたあの世にある。	○
他者の気持ちを思いやりそれに共感すること。	○
先祖のために、周期的に宗教的儀礼をおこなうこと。	○
先祖に感謝すること。	○
精霊・妖精・天使などは、存在する。	○
世間や家族から離れ、ひっそりと隠れて住むこと。	○
世界は、精神と物質という二つの原理でなりたっている。	○
世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。	○
人間を含むあらゆるものは、「魂」があるから存在することができる。	○
人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。	○
人間の本性は悪である。	○
人間の自由意思が信仰の基盤である。	○
人間の「魂」は清らかでけがれがない。	○
人間には「魂」がある。	○
人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。	○
人は、その人が持って生まれた宿命を実現できれば幸福となり、実現できなければ不幸となる。	○
神秘的な体験で、我を忘れること。	○
信仰のために、外敵と戦うこと。	○
宗教的指導者に従うこと。	○
宗教的儀礼は、救いをもたらす。	○
宗教的な動機から、社会活動を行うこと。	○
宗教教団に従うこと。	○
宗教の理想を政治に反映させること。	○
周囲の人々を愛すること。	○
執着がなければ、人はあらゆるものごとから大きな幸福を感じることができる。	○
自分の「魂」を自覚すること。	○
死後の世界は、より幸福な世界とより苦しい世界に分かれている。	○
祈りや宗教的儀礼によって、人は災難や苦境から救われる。	○
異なる「神」は、それぞれに異なる働きをしている。	○
異なる「神」が、協調している。	○
この世界の現象は、より本質的な世界の反映である。	○
この世界には終わりがある。	○
この世界には最高の宗教があり、すべての宗教の教えは、その最高の宗教の教えに含まれる。	○
ある人がどんな罪を犯しても、その人が「神」を信じれば救われる。	○
「神」を信じることで、この世での願望を実現することができる。	○
「神」や霊と直接交信できる人がいる。	○
「神」は絶対者であり、相対的なこの世を超越している。	○
「神」は、絶対的に正しい。	○
「神」は、人間の求めに応じて現れる。	○
「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。	○
「神」は、現状を変えようと、人間に働きかける。	○
「神」は、この世界からはるか遠くへだたったところに、存在している。	○
「神」の世界は、この世界と密接に関連している。	○
「神」の愛を感じること。	○
「神」に従うこと。	○
「神」に感謝すること。	○
「神」による奇跡はある。	○
「神」には性別がある。	○
「神」と人間とをつなぐ媒介が存在する。	○
「神」からみて女性と男性には違いがある。	○
「神」から、高級霊、人間、動物などにいたる、上から下までの階層・序列がある。	○

この方法を採り、8 カ国のデータを因子分析し、共通の因子構造が成り立つかどうかを、3 分の 1 の 61 項目において検討してみた。回答においては「意味が理解できない」という回答もある程度の割合を占めたので、61 項目中 4 個以上「意味が理解できない」と答えた人を削除した。その結果、分析に用いたサンプル数はインドが 307 人、トルコが 319 人、日本が 286 人、アメリカが 355 人、イタリアが 381 人、タイが 355 人、台湾が 351 人、ロシアが 339 人であり、8 カ国の合計は 2,693 人であった [12)]。

これらの人を対象に、61 項目について主成分分析を行い、その結果を参考とし、因子構造を仮定して、確証的因子分析を試みた。８カ国 2,693 ケースに対する確証的因子分析の結果、4 因子モデルがデータに適合した [13)]。しかしながら、４因子間の相互の相関は高く、最も低い２因子間の相関が 0.343 である以外は、0.562 から 0.736 であり、因子数が４とすることが適切であるかどうかは、さらなる検討が必要であろう [14)]。

５．2016 年調査

2015 年度調査から 8 カ国で共通の尺度を構成する質問文が一定数以上あることは、ほぼ確実だと思われた。しかし、2015 年調査では尋ねる質問文が 186 と多かったため、一人の回答者にはそのおよそ 3 分の 1 の 61 項目と全員に共通の 3 項目を尋ねるという方法をとった。やはり全員に尋ねることが必要で、共通質問文から精選して、90 項目を尋ねた（表 3 参照）。選択肢は「反対」「どちらかというと反対」「どちらともいえない」「どちらかというと賛成」「賛成」「意味が理解できない」「答えたくない」である。

実施開始の時期は 2016 年 3 月で、対象とした国は 2015 年調査と同じインド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアの 8 カ国である。方法もまた 2015 年調査と同じで、調査会社を通してインターネット調査を実施した。

調査票は日本語で作成し、翻訳会社に委託して翻訳を行った。なお、2015 年調査と同じ質問文はそのままの翻訳を用い、翻訳を依頼した翻訳会社も同じである。

調査内容は、属性については、性別、年齢、職業、居住地、学歴で、アメリカについては人種・民族を質問に追加した。また、宗教的信念を中心に宗教意識に関わる項目以外にも宗教的多元主義、幸福度、利他性など宗教意識と関連が深いと考えられる項目も含め、宗教性との関連をみることができる設計になっている。

質問文につけたリード文も 2010 年日米比較調査、2015 年調査と同じである。20 歳から 59 歳までの男女を対象として、年代と性別で人口に比して割り当て、各国で 500 人以上の回収を目指し、インド 537、トルコ 541、日本 571、アメリカ 520、イタリア 522、タイ 513、台湾 552、ロシア 542 の有効回答を得た。

宗教に関する質問文 90 項目を 8 カ国すべてのデータで主成分分析し、その主成分の固有値をスクリープロットした図が図 1 である（N は 2385）。大きな主成分が一つあり、２番目以下の主成分の固有値は相当小さいことがわかる（主成分の固有値は 50.04 で寄

与率は 55.6%)。この結果は、8 カ国全体で 1 つの主成分があるということができる。8 か国のそれぞれのデータを主成分分析しても、その寄与率は、インド 38.8%、トルコ 46.6% とこの 2 つの国は少し低いが、日本 58.7%、アメリカ 61.1%、イタリア 58.7%、タイ 54.7%、台湾 50.2%、ロシア 49.6% であり、同じように大きな主成分があることがわかる（図表は省略)。

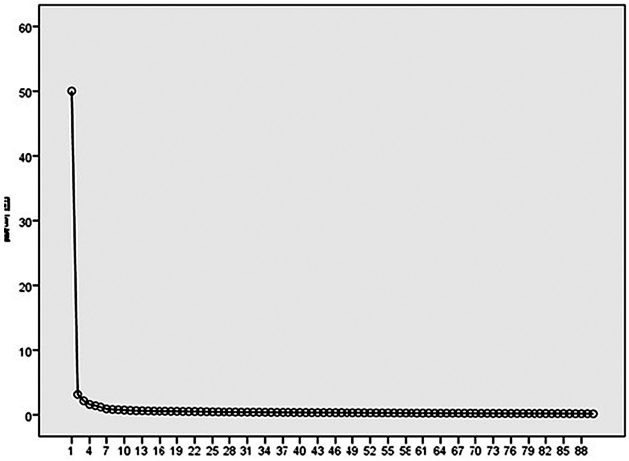

図 1　2016 年調査　主成分分析のスクリープロット

表3　質問文の一覧　その3

質問文	2010年日米比較調査	2015年調査	2016年調査
良い行ないにも悪い行ないにも、目に見えない力により、それ相応の報いや罰がある。	○	○	○
善い霊が、一人一人の人間を見護っている。	○	○	○
先祖や死んだ家族の霊は、それらが幸福なら子孫をまもってくれ、逆に苦しんでいれば子孫に悪影響を与える。	○	○	○
人間は誰でも救われる可能性を有する。	○	○	○
人間は、前世から現世そして来世へと、生まれ変わる。	○	○	○
人間は、この世界をより良いものにするという使命を、「神」から与えられている。	○	○	○
人間が幸福を願うことには、「神」にとって深い意味がある。	○	○	○
神秘的・超越的な意識に、到達することができる。	○	○	○
信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。	○	○	○
宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。	○	○	○
宗教的な教えに基づき、自分の心のあり方をふりかえって正すこと。	○	○	○
宗教の教えを他者に伝え、広めること。	○	○	○
執着がなければ、人は本当の自由を感じることができる。	○	○	○
自分の存在や願望をふくめ、すべてを「神」にまかせること。	○	○	○
自我を捨てれば、聖なる力が働く。	○	○	○
苦境は、「神」を信じることで、救いのきっかけになる。	○	○	○
教典の言葉には、聖なる力がある。	○	○	○
我が国は「神」によってまもられている。	○	○	○
悪魔や悪霊は、存在する。	○	○	○
この世界以外にも、目に見えない世界がいくつかの上下の階層に分かれて存在している。	○	○	○
あらゆる人は、「魂」のレベルにおいて、他者とつながっている。	○	○	○
「神」を信じることで、収入が増える。	○	○	○
「神」またはその代理が、人間を救うために、この世に生まれてくることがある。	○	○	○
「神」はこの世界の中のどこにでも常に存在している。	○	○	○
「神」は、人間の内に存在している。	○	○	○
「神」は、人間の外に存在している。	○	○	○
「神」は、根本的な原理である。	○	○	○
「神」は、意思や人格を持つ。	○	○	○
「神」の力により、死の不安や恐怖に打ち克つ(うちかつ)ことができる。	○	○	○
「神」の力によって、世界は維持され進化している。	○	○	○
「神」の存在や姿を、神秘的な形ではっきりと感じたり見たりすること。	○	○	○
「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。	○	○	○
「神」によって救われるには、今までの自分自身を否定しなければならない。	○	○	○
「神」と人間とをつなぐなんらかの媒介が無ければ、人は「神」とかかわることができない。	○	○	○
他者に愛を向けると、目に見えない力により、良い結果が自分に返ってくる。	－	○	○
聖地を、宗教的な動機から、訪(おとず)れること。	－	○	○
聖なるシンボルや言葉に注意を集中すること。	－	○	○
世界が不完全であることには、むしろ聖なる意味がある。	－	○	○
人生のあらゆることの価値は、自分自身がそれをどう意味づけるかで決まる。	－	○	○
人々が互いに心を込めて係り合うとき、個人を超えた大きな「魂」が現れ、そこに「神」の力が働く。	－	○	○
人間の幸福を求める心が信仰の基盤である。	－	○	○
人間の「魂」は「神」に通じている。	－	○	○
人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。	－	○	○
人間が信仰することによってはじめて、「神」はその力を発揮することができる。	－	○	○
人は、その人固有の願望・使命をこの世で果たすために、生まれる。	－	○	○
人の運命や幸・不幸は、星の動きと深く関連している。	－	○	○
人が存在できるのは、各人が心身の根底に何らかの本質を有しているからである。	－	○	○
人がこの世で経験するあらゆることは「神」が「魂」の成長のために与えた機会である。	－	○	○
信仰とは、人間が自由意思により自分を超えた存在を求めることである。	－	○	○
宗教的修行などにより、「神」と一体となることができる。	－	○	○
宗教教団を通じて、救いがもたらされる。	－	○	○
宗教教団は、その存在自体が聖なるものである。	－	○	○
自分の身体をコントロールした宗教的修行により、聖なる力をえることができる。	－	○	○
自分の信仰を、「神」あるいは他者に言葉で伝えること。	－	○	○
時間は、過去から未来に向かって一方向に直線的に流れるのではなく、季節がくり返すように、あるサイクルで循環するものである。	－	○	○
祈りや宗教的儀礼によって、人間の運命は好転する。	－	○	○
何か大きな見えない力によって、私たちは生かされている。	－	○	○
一つの「神」が、時と場合に応じて、異なる形で現れる。	－	○	○
より多くの人々が自分の「魂」を自覚すれば、世界や社会はそれだけよくなる。	－	○	○
より多くの人が「神」を信じれば、それだけ世界や社会はよくなる。	－	○	○
ある人の意識が純粋であるとき、そこに聖なる力がはたらく。	－	○	○
ある人が救われるかどうかを「神」が最終的に決める裁き(さばき)がある。	－	○	○
ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。	－	○	○
ある人が救われるかどうかは、その人が「神」を信じるかどうかで決まる。	－	○	○
ある人が救われるかどうかは、あらかじめ個別に決まっている。	－	○	○
ある人が何かと深く一体になれれば、そこに聖なる力がはたらく。	－	○	○
あらゆる人間は何らかの形で「神」や霊と交信できる。	－	○	○
「神」を信じることで、死後の幸福を実現することができる。	－	○	○
「神」を信じてこの世での願望が実現することには、深い意味がある。	－	○	○
「神」の救いがあるように、死者を丁重に弔うこと。	－	○	○
「神」と「魂」との創造的な力が、幸福の源泉である。	－	○	○
利己心は、目に見えない力により、苦しみや不幸の原因となる。	－	－	○
目の前のものごとに注意を集中することで、「魂」が自覚される。	－	－	○
超能力や奇跡はある。	－	－	○
他人や霊が自分に強い悪感情を持つことは、目に見えない力により、不幸をもたらす。	－	－	○
世界の平和を「神」に祈ること。	－	－	○
世界が理不尽に見えるのは、仕方のないことであり、「神」の責任ではない。	－	－	○
人間は、「神」から生まれ、死後に再びそこに戻る。	－	－	○
人間の自由意思は、「神」とつながっている。	－	－	○
人間には、「神」に近い・遠いという霊的なレベルの違いがある。	－	－	○
自分の直観は「神」や「魂」からのメッセージである。	－	－	○
自分の思考と感情を、客観的に観ることで、「魂」が自覚される。	－	－	○
この世界のあらゆるものは、限りのある存在だが、永遠の存在とつながっている。	－	－	○
この世以外の目に見えない世界が、この世界と密接に関連し合っている。	－	－	○
この世のあらゆるものは、目に見えない力により相互に関係しあって存在している。	－	－	○
あらゆることを心を込めて行なうことで、「神」とつながることができる。	－	－	○
「神」は、精神的な原理と物質的な原理の二つをかかわりあわせることで、世界を存在させる。	－	－	○
「神」は、宇宙と一体の大生命である。	－	－	○
「神」は、「神」それ自身を否定することで、創造や救済を行う。	－	－	○
「今、ここ」での瞬間を大切にすることで、聖なる力が働く。	－	－	○

表 3 は、2016 年調査の質問文である。2010 年日米比較調査と 2015 年調査でも使用した質問文には〇をつけてある。この質問文の中で、第 1 主成分の値が .5 以下の質問文は、「執着がなければ、人は本当の自由を感じることができる。」が .475 で、「世界が理不尽に見えるのは、仕方のないことであり、「神」の責任ではない。」が .481 であった。ほかには .5 台の質問文が、「人生のあらゆることの価値は、自分自身がそれをどう意味づけるかで決まる。」「人間は誰でも救われる可能性を有する。」「ある人が救われるかどうかは、あらかじめ個別に決まっている。」の 3 つ、そのほかは .6 以上の高い値であった。

6．今後の課題

日本の宗教性は欧米の宗教とは異なるとはよく言われる。確かに表 1 で示したように、日米において共通とならない質問項目はいくつもあり、表 1、表 2 でみられるように 8 カ国で異なると思われる質問項目もまた数多くある。しかしながら、慎重に精選していった 2016 年調査の質問文 90 項目においては、8 カ国で大きな 1 つの主成分を抽出することができた。もちろん、この 90 項目が宗教性の共通する項目であるとは断定できないが、その候補の一部であることは確かであろうし、90 項目がひとかたまりになることから、少なくとも共通する宗教性が 1 つはあるのではないかと思われる。現在、共通する宗教性の尺度が 2 つ以上ある可能性を追求するために、倫理的な項目や性格を測るような項目を含む調査票を作成し、8 か国で調査を企画・実施している。

しかしながら、今後さらに検討すべき点は残されている。

これまでの調査では、質問文が「理解できない」という回答が少なくない。宗教文化の異なる対象国に統一の質問をするために、その国の宗教文化を前提にした場合にある程度の「理解できない」という回答が生じることはやむを得ないが、この回答の扱いが難しい。10%、あるいは 20% 程度の「理解できない」という回答が出た場合に、その質問文は削除するべきなのだろうか。「理解できない」という回答は信仰心がないと判断してもよいのだろうか。

また、分散分析を用いた DIF 分析や多母集団同時分析という分析方法は有効であるが国の数が増えたときには、共通性を捉えるのが困難になる。さらに、質問文のそれぞれは 5 段階、あるいは 7 段階の選択肢で回答を行っているが、それらの選択肢が等間隔であるという保証はなく、また回答分布が正規分布しているとも限らない。これらの欠点は多くの社会調査データに当てはまるが、どこまで許容されるのだろうか。

さらに根本的ではあるが、乗り越えがたい課題は、調査がオンラインの調査で特に高学歴者に偏っていることであり、また各国のサンプル数が 500 程度であり、分析によっては用いているケース数が 300 程度まで少なくなっている場合もあることなどから、大規模で質の高い調査データをとることが望まれる。とくに欧米のキリスト教圏ではないイスラムの国々やアジアや南米、アフリカの国々などのデータがあれば、より広い範囲

での宗教の共通性を論じることができるだろう。

以上のような問題を含め、さらに研究を進めていくことが必要である。

謝辞

本稿は、当時大正大学、現在東京工業大学の弓山達也を代表とする科研費基盤研究 B「現代宗教性の類型化と受容可能性－体験談のデータベースとモニタリング調査」（課題番号 20320015）と大正大学の星川啓慈を代表とする科研費基盤研究 A「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開－国際データによる理論と実証の接合」（課題番号 25244002）の研究成果の一部である。2 つの科研費の研究の研究分担者である國學院大學の黒崎浩行、青山学院大学の真鍋一史、関西学院大学の對馬路人、桜美林大学の長谷川（間瀬）恵美、北海道大学の宮嶋俊一、大阪府立大学の秋庭裕、大正大学の松野智章、上智大学の島薗進の先生方との議論によって、質問文が作成され、調査が進められました。ここに記して感謝します。とくに関東学院大学の渡辺光一先生には、質問文の整理からデータ分析まで多大な協力をいただきました。深謝いたします。

注

1） 堀一郎・小口偉一監修 (1973)、エリアーデ他 (1994)、國學院大學日本文化研究所編 (1994) などを参照した。

2） 教典類は、福音書、使徒信条、コーラン、敬神生活の綱領、大祓詞、PL 処世訓、万人幸福の栞（丸山敏雄）などを参照した。

3）大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編 (2008)、成美堂出版編集部編 (2008)、ロポフ・バックルズ (2002) などを参照した。

4）詳しくは川端 (2016) を参照。

5） DIF 分析の方法について、田崎 (2008) がわかりやすい解説である。また、この日米比較調査データにおいて、DIF 分析をどのように使ったのかについては、すでに渡辺・黒崎・弓山 (2011) で詳細に説明されているので、参照していただきたい。

6） 等価性を検証する方法としては、分散分析を用いた DIF 分析、ログリニアを使った DIF 分析、ロジスティック回帰分析を用いた DIF 分析、確証的因子分析、多母集団分析などが様々な分野で用いられている。宗教の領域でも同じような分析が可能であり、Richards and Davison は、Kohlberg の 6 段階からなる moral development theory が、信仰に影響されず、普遍的で不変なものかを DIF 分析としてのログリニア分析を用いて検証した (Richards and Davison 1992)。しかし、宗教の領域で、これらの分析手法を用いた計量的分析はあまりみられない。

7） なお、このデータにおいては、non-uniform DIF でなかった項目 23 項目をさらに精選し、12 項目を用いて 3 因子構造が日米共通の構造として抽出される。その結果の詳細については、別稿で報告する。

8）ムスリムの多い国としてはサウジアラビアをはじめ、北アフリカ、中央アジアの国々が対象として考えられるが、インターネット調査の実施という点で可能性があるのは、トルコとインドネシアであった。トルコはイスラム教圏の中では世俗化している国といわれているが、世界価値観調査や ISSP 調査に参加しており、それらの調査による宗教に関わるデータとも今後比較することができるため、トルコを対象とした。

9）東アジアからは人口からみても社会経済的な影響から考えても、中国を対象とすべきであると考えられるが、宗教に関する社会調査実施が難しいという点で中国は対象としなかった。

10）英語に関しては、ネイティブのアメリカ人と十分にチェックを繰り返した。その他の言語については、トルコ人の宗教研究者にチェックしてもらった他は、翻訳会社の担当者に複数回にわたって疑問点を確認しながら翻訳した。なお、翻訳を依頼した翻訳会社はこれらの言語がすべて扱える、創業から 50 年以上の大手の翻訳会社である。

11）その他の詳細な回収状況は川端 (2016) を参照。

12）61 項目について、尖度や歪度を確認したが、極端に歪んだ分布ではないことを確認している。

13）8 カ国全体で、欠損値があるケースはすべて除いた（リストワイズ）では、ケース数は 1,971 と減少するが、ペアワイズの場合と同じく、適合度は悪くはなかった。

14）他の方法で共通性を抽出する分析ができないかを検討し､8 カ国のデータをまとめて、ラッシュモデルで分析するという方法を考えた。ラッシュモデルは、確率モデルであるロジットモデルの一種であり、項目応答理論のもっとも単純な一母数モデルである。ラッシュモデルについては、以下の文献を参照（静 2007, 豊田 2012, 2013, Von Davier 2016 など）。ラッシュモデルの結果を用いて、2016 年調査の質問文を選んでいる。ラッシュモデルによる分析結果については、別稿で検討したい。

参考文献

21st Century Center of Excellence Program (2003), *Japanese College Students' Attitudes Towards Religion: An Analysis of Questionnaire surveys from 1992 to 2001*, Tokyo: Kokugakuin University

エリアーデ、M.・I. P. クリアーノ（奥山倫明　訳）(1994),『エリアーデ世界宗教事典』, せりか書房

Hill, P. C. and R. W. Hood, Jr. eds. (1999), Measures of religiosity, Birmingham, AL: Religious Education Press

堀一郎・小口偉一監修 (1973),『宗教学辞典』, 東京大学出版会

井上順孝 (2005),「宗教性」, 井上順孝編『現代宗教事典』, 弘文堂 , 210 頁

金児暁嗣 (1997),『日本人の宗教性―オカゲとタタリの社会心理学』, 新曜社

川端亮 (2016),「宗教的信念における共通の因子－８カ国調査の結果から－」『大阪学大学院人

間科学研究科紀要』, 42, 189-208 頁
國學院大學日本文化研究所編 (1994),『神道事典』, 弘文堂
Manabe, K. (2011), Cross-national comparison of the dimensions and structure of religiosity: ISSP 2008 data analysis. *Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies (Aoyama Sogo Bunka Seisakugaku)* , 3(1), pp.3-35
西脇良 (2004),『日本人の宗教的自然観―意識調査による実証的研究』, ミネルヴァ書房
Richards, P. S. and Mark L. D. (1992), Religious Bias in Moral Development Research: A Psychometric Investigation, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 31 (4), pp. 467-485
ロポフ, B. and L. バックルズ（ペマ ギャルポ・石塚政樹 訳）(2002),『世界一わかりやすい世界の宗教』, 総合法令出版
成美堂出版編集部編 (2008),『一冊でわかる イラストでわかる図解宗教史』, 成美堂出版
静哲人 (2007),『基礎から深く理解するラッシュモデリング―項目応答理論とは似て非なる測定のパラダイム』, 関西大学出版会
杉山幸子 (2004),『新宗教とアイデンティティ―回心と癒しの宗教社会心理学』, 新曜社
大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編 (2008),『世界の宗教教科書』, 大正大学出版会
田崎勝也 (2008),『社会科学のための文化比較の方法―等価性と DIF 分析』, ナカニシヤ出版
豊田秀樹 (2012),『項目反応理論［入門編］第二版』, 朝倉書店
豊田秀樹編著 (2013),『項目反応理論［中級編］』, 朝倉書店
Van de Vijver, F, J. R. and K. Leung (1997), *Methods and data analysis for cross-cultural research*, Thoudsand Oaks, CA: Sage
Van de Vijver, F. J. R., V. H. Valchev, and I. Suanet (2009), Structural equivalence and differential item functioning in the social axioms survey. In *Psychological aspects of social axioms*, edited by K. Leung and M. H. Bond, pp. 51-80. New York: Springer
Von Davier, M. (2016), Rasch Model, in Wim J. van der Linden ed. *Handbook of Item Response Theory Volume One Models*. Boca Raton, FL: Taylor & Francis Group, pp. 31-48
Wach, J. (1958), *The Comparative Study of Religion*, New York: Columbia University Press
渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也 (2011),「日本の宗教概念の構造とその幸福度への効果―両国の共通性が示唆する普遍宗教性―」,『宗教と社会』, 17 号, 47-66 頁

Religious commonalities on measurement: Details of three Internet-based surveys

Akira KAWABATA

This study is a multi-year cross-cultural examination of religious commonalities. Although tremendous differences exist between East Asian and Western religious cultures, common cross-cultural elements transcend their respective cultural contexts. This study employed three Internet-based religious belief surveys. The first survey, conducted in 2010 in the United States and Japan, consisted of 100 questions. The second survey in 2014 consisted of 186 questions, including some selected from the first survey and was administered in the following eight countries: the United States, Italy, Russia, Turkey, Taiwan, India, Thailand, and Japan, where Protestant, Catholic, Greek Orthodoxy, Islam, Taoism, Hinduism, Theravada Buddhism, Mahayana Buddhism, and Shinto represent the world's religions. The third survey, conducted in 2016 in 8 countries, consisted of 90 questions. Survey data analysis found one common dimensional structure in eight countries.

The first and second survey results allowed researchers to detect questions to show commonalities between the United States and Japan, and within the eight countries. While using differential item functioning (DIF) analysis detects common items, it proved to be so sensitive that it misses the most possible detectable commonalities when using multiple target countries. Constructing a probability model structure enabled all third-survey data items to be analyzed simultaneously.

Although cultural backgrounds differ, the results show that the eight countries share a single-dimensional structure of various religious belief items. We are planning the next survey and expect to have a wider structure including common items of morality and mentality. The wider structure might be also one-dimensional or two-dimensional at most.